

## 知の細分化

ジョリートによる俗語作品の刊行事業は、裏を返せば、印刷の発展によって俗語が流布していたからとも言えるであろう。ジョリートはその波を敏感に察知して商売を始めたとも考えられよう。ラテン語を基調とした統一世界の互解する音が静かに兆しつつあったのである。それはルターなどによる宗教改革によって、カトリック的統一性が崩壊した事態とも重なり合っている。また近代自然科学に代表される新たな知的分野の研究が盛んになってきて、それが印刷技術の進展に伴って拡充した事実も、旧来の知に大きな打撃を与える要因になった。

たとえば、サヴォナローラの反対派に対する論文、ルターをめぐる論争、フランスの宗教戦争に伴う政治論争、天動説と地動説の宇宙観論争などは印刷の発達のおかげで、回答にも日数がかからず、大勢の人たちが参加できた。以前は討論するために遠方からわざわざ集い、聴衆も限られており、内容普及にも時間を要したからである。科学書も挿絵の鮮明な複製が可能となり、解剖書、動植物図鑑、地図、機械図などに精度が増した<sup>100</sup>。

こうして印刷文化によってある種の知は、それまで埋もれていたのが陽の目を見、ある種の知は華々しくも登場したのである。

十六世紀以後ヨーロッパは事実上、すでにカトリック（普遍的）世界ではなくなった。普遍性を支える知識はいつのまにか潰え去り、細分化された個別的な知が芽吹き始めたのである。そしてそれには印刷文化の隆盛が蔭ながら一役買っており、想像以上に大きなインパクトを与えたのである。

## 4 ム文法Vの位置

## 批判精神

ルネサンス期の思想・哲学の啓蒙的普及書として、二十人あまりの思想家を選び出して論じた邦語文献に野田又夫『ルネサンスの思想家たち』（岩波書店、一九六三年）がある。新書判の手頃さも手伝い、またボンボナツィ、テレジオ、ザバレラなど日本ではいまだによく知られていない哲学者も取り上げられていて、これを読むことでルネサンスの多様な知的思潮の認識への足掛かりとなりうる入門書的価値のある本である。年代順に紹介がなされており、第一番目には十五世紀前半に活躍したロレンツォ・ヴァッラが扱われている（最後は十七世紀前半に没したガリレオ）。

ヴァッラは「コンスタンティヌスの寄進状」が八世紀に作られた偽文書であることを指摘したことと著名な学者であり、ここでもム批判的人文学者Vの副タイトルが与えられ、不屈の論客として語られている。彼の哲学的著作としては『快樂について』（一四三一—三三年）、『自由意志について』（一四三五、四三年）が有名である。

ヴァッラは持ち前の鋭い批評眼をもって、当時隆盛を極めつつあったブルーニ、パルミエーリ、ポッジョ・ブラッチョリ、二等を代表格とする市民的人文主義者を攻撃する。当時の人文主義的教育とは、文法・修辞学・道徳哲学・歴史・詩学の五分野の習得で、わけでもダンテ、ペトラルカ以来の伝統である道徳哲学は古代人の叡智を營養として人間がこの世で生きていくうえでの責任、人間の尊厳、美德の探究と悪徳の駆逐・回避を扱ったもので、ヴァッラの活躍した十五世紀になってますます脚光を浴びるようになった。しかもこの時代の人文主義はム市民的Vと冠されていることでも判るように、都市コムーネにおける市民のありよう、市民的名声の追求など、本来キリスト教との仲介的立場をとるべきはずの道徳哲学が宗教色を失い、市民道徳を扱う学問として自律的に機能するようになった。本質的にキリスト者であるヴァッラはこれに反発し、人文主義の中に宗教色を回復させんとする。そのために彼は五分野の中の修辞学に着目し、キリスト教信仰のために古代の著述家の豊かな表現と説論を用いて信仰心を培い徳及び人生意念を涵養せんとした。したがってヴァッラにとって人文主義とは、キリ

スト教信仰と修辭学との幸福な結婚を意図したものであったのである。

となれば当然、批判の対象である市民的人文主義（キリスト教信仰と道徳哲学の結合）の依って立つストア派の倫理学を排するに至り、そのためにヴァッラは対照的なエピクロスの倫理学を糧として取り入れて人文主義の刷新を図ろうとする。それだけ彼はキリスト教信仰を敬重していたわけで、次にキリスト教を硬直させた中世のスコラ哲学に批判の矢が向けられるのももつともなことなのである。彼は六世紀のポエティウスから、全中世世界は古典古代のみならずキリスト教世界をも変形せしめたとして、聖トマスでなく聖パウロに回帰すべきだと主張する。さらに聖書を文献学的に読み直すことも奨励している。

以上を見ても判るようにヴァッラの批判精神には面目躍如たるものがあるが、後世への影響力という点からすると、前掲の二つの哲学書よりも、同じく鋭利な批評眼をもって書かれた『ラテン語の優雅さについて』(Elevante Linguae Latinae (一四四四年))の方が重要である。この本は今日あまり論じられる機会はないが、当時人気を博した書物の一冊で、人文主義的文献学の歴史に多大な感化を与え、ラテン語の文体論の教科書として十九世紀まで重用された<sup>66)</sup>。

古代のローマ人の用いたラテン語の正しい用法を、文法・表現法・文体といった多くの面から確立しようとしたもので、狭義の文法書の定義には納まりきらない著作である<sup>67)</sup>。もとより彼自身が厳格な言語認識を持っており、独自の理念をあてはめることで結論を導き出そうとしている。飛躍かもしれないが、ヴァッラのこうした姿勢は、言語は思想を解するための一道具であるという考えにも通ずるのではあるまいか。「コンスタンティヌスの寄進状」に対する批判も、究極のところどころでこうした言語文献学的批判精神に基づいていたと考えてもよいであろう。

『ラテン語の優雅さについて』でヴァッラは、ラテン語がその本来的な優雅さと純粹さを取り戻すべきだと説くわけなのだが、この場合のラテン語とは「文法V」とほぼ同義であることに注目する必要があるであろう。ルネサンス期にラテン語の美しさの回復を説かざるをえないことは、裏を返せばラテン語が乱れていた事実を指すわけであり、それはそのまま正確な文法を正しく捉え直す作業とも等しいのである。

それでは正しいラテン語、つまり文法とは何なのか。「文法V」はルネサンス期でどのような位置を保ちえたのか。以上をヴァッラの時代に至るまで辿って、ヴァッラを軸に考察してみたい。

#### 文法への関心

文法とは何かを考える前に、文法への関心という点から少し整理してみよう。大きく分けて次の五点にまとめるのではないだろうか。

- (1) 言語の性質についての哲学的関心。
- (2) 言語それ自体の現象への関心。
- (3) 母国語への言語としての関心。
- (4) 外国語習得のための言語としての関心。
- (5) (3)・(4)についての教育者としての関心。

ここでは主に(3)・(4)・(5)を中心に考えを進めたいと思う。なぜなら(1)はプラトンの『クラテュロス』に見られるが、それはソクラテス以前の学者からのもので、それも文法を副産物的に取り上げているにすぎないからである。それでも、名詞・格・性・動詞・時制など、言語事象の分類はなされている。(2)は十九世紀以降のいわゆる文法学に該当するので論外としたい。

ところでもうひとつ別の局面からみると、文法というのは自由学芸(artes liberales)のひとつである。自由学芸はギリシアを起源とし、自由市民の教養豊かな生活のために必要な生産的技芸、実用的技術として教授されており、いわゆる哲学とは異なっていた(哲学——愛知——は真理を求めんとする客観的で純一な知識を指しており、自由学芸習得後哲学的研究に移行するというのが、ギリシア風の学のカテゴリ——とされ

た)。こうした自由学芸の中に位置する文法とはもちろん、(3)・(4)・(5)の枠内に留まっていることは言うまでもない。

ちなみに自由学芸はアリストテレス以前は六つ（音楽・体育・詩学・文法・修辞学・弁証論）であったが、アリストテレスは七つ（体育・文法・彫刻術・音楽・弁証論・修辞学・詩学）とした。紀元前一世紀のローマの文法学者ウァロは九つ（文法・弁証論・修辞学・幾何学・算術・天文学・音楽・建築）としたが、その後建築と医学は機械的かつ獨創性に欠けると除かれて、文系的な<sup>トリクワイム</sup>三学<sup>トリクワイム</sup>（文法・弁証論・修辞学）と理系的な<sup>クワド</sup>四科<sup>クワド</sup>（幾何学・算術・天文学・音楽）とに分類され、これが後世まで伝えられていくことになる。

一目瞭然のことだが、いずれにも文法がきちんと入っており、文法学習への関心の高さが見て取れよう。

#### 古代と中世の文法書

文法はギリシアとインド（サンスクリット）でしか発達しなかったみなされている。なかでも最古のギリシア語文法書はディオニシオス・トラクスの『文法』であり、これは聖書と同じくらしいの影響力を持ったと言われているほどで、西欧の伝統文法の源となった。

ローマは前述のようにギリシアの自由学芸を継承するのだが、とりわけ文法と修辞学を重んじた。文法書として古代では、ウァロによる『ラテン語論』（前一世紀）があり、中世初期では初級レベルにドナトゥスの『小文典』（四世紀）、プリスキアヌス『文法教程』（六世紀）の二種類があった。以上によってラテン語の基礎論ができたと言えよう。

当時は東方のビザンティンでさえ、ローマ法の研究と施行はラテン語で行なわれていたほどであった。しかし哲学と医学はラテン語は用いられずギリシア語のまま、ローマ帝国下では必須の教科とはなりえなかった。というものの、帝国下の教育は多くがギリシアの模倣だったので、ローマの貴族の子弟は大人同様、自由学芸をラテン語と（教養あるギリシア人奴隷から会得した）ギリシア語の両方で学んでおり、二言語併用であった。文法家たちもギリシア文法を基本としてラテン文法を組み立てた。ローマ文化が知的な面ではギリシアの陰に常に位置していたことが文法の面からも窺えよう。

さて時代が中世になると少し事情が異なってくる。十二世紀ルネサンスを迎えてアリストテレスの文献の翻訳がなされ、その論理学によってスコラ哲学が構築されて、キリスト教がいわゆる中世的色彩を深めると、これまでの異教徒による素朴な記述式の文法書が排斥されはじめる。ドナトゥスとプリスキアヌスの時代は終わりを告げ、スコラ哲学性を宿した文法書が登場してくる。中級レベルのアレクサンデル・デ・ピラディ『教本』（二六四五行の長短短六歩格）が代表的な教書である。

文法書とはむしろラテン語の文法書だが、ここで考慮せねばならぬことのひとつに、ラテン語は話し言葉としてはすでに死語となっていた事実がある。イタリア半島では少なくとも、十世紀から十二世紀の終わりまでには俗語は話されていたからである。ラテン語は書き言葉の役目を担うにすぎず、ある意味では外国語であった。したがって文法を学ぶことは書き言葉として共通語たるラテン語（外国語）を学ぶことを意味しており、ひとつの知的教養を修めることでもあった。

#### △文法△とは

中世において文法はどう捉えられていたであろうか。ソールズベリーのジョン（ヨハネス・サリスベリエンシス）の『メタロギコン』（一一五九年）には次のようにある。

文法は正しく話し書くための学であり、あらゆる自由学芸の源である。それはすべての哲学の揺籃であり、いわばすべての文学研究を育む頭である。

この一節は文法が自由学芸習得の基礎であることを示している。  
また十四世紀のある文献には、

文法とは正しく話し書くための学であり、すべての学問の源であり礎である。<sup>100</sup>  
とある。

かくしてルネサンス期に至るまで文法とは、ラテン語を正しく読み書きすることであり、自由学芸の中心としての位置を占めるようになって、外国語教育の一環としての文法への関心が登場してくる。中世盛期からルネサンス期にもなるとラテン語が外国語であることは前述したが、それも古典ラテン語でなくて中世ラテン語であることに着目してほしい。

ともあれ、文法は四部門（正書法・韻律学・品詞論・統語論）に分かれていた。さらに文法の根本的特徴は、言語学的面のみならず文学的鍛練にも見られた。文法規則は文学研究を前段階としても習得された。文法家は狭義の文法以外のものも研究した。つまり作文術（特に書簡作成法）と詩学であって、彼らは中世もルネサンス期もそれ以後も、作文と詩の先生でもあった。

しかしながら文法の持つこうした両義性はクインティリアヌス『弁論術教程』（一世紀）以来の伝統なのである。彼は文法を、題材の技術的面を扱う文法体系と、詩人を解釈する解釈学とに分けていた。さらに文法のこうした二極性は生存競争に打ち勝ったひとつの知の在り方として興味深い要素が含まれている。すなわち西ローマ帝国崩壊時に蛮族の侵入があっても、文法という学問だけが生き延びて、帝国瓦解後の廢墟の地に建てられた聖俗両方の教育機関は、文法一点で結ばれていたとも考えられるからである。<sup>101</sup> コミュニケーションの手段としてラテン語が使用されざるをえなかったからである。出世のためにもラテン語による自己表現能力が必要であった。ルネサンス前夜のイタリアの大学では法律（ローマ法）の研究が第一だったし、ラテン文法の会得と作文の上達は不可欠であった。

文法は他の自由学芸の布石であると同様、全教育体系の基礎なのであり、ルネサンス期を通しての教育課程におけるラテン語の以上の特徴的位置は、*studia humanitatis*（古典的人間教養の研究）によっていっそう強化されたと考えてよいであろう。

自由学芸の根幹として文法は尊ばれたが、やっかいで無味乾燥な学問という誇りをまぬがれなかったのは現在と同じであった。学生たちは規則の暗記を強いられた。前掲のデ・ビラディの『教本』が韻文で書かれていたのは暗記に都合だったからにはかならない。ドナトゥスの『小文典』は問答形式の体裁を取っていた。

しかし一方では、文法知識は将来就く職種に役立つという考え方もあって、なべて若者に化せられた通過儀礼であった。さらに文法擁護論者の見解を積極的に見ていくと、文法に精通することは、諸学の基盤が文法であることから、他の学知に通ずることもあった。ひとつの学問についての知識が他のあらゆる知を構築するわけで、ここに知の円環、有機性思想が看取れよう。文法（ラテン語）はその根源の位置を占めていたのである。

#### 古代への眼差し

ルネサンス期の人文主義的文法家の根本的特色をひとつ挙げるとすれば、それは古典古代への強烈な眼差しと  
言えるのではあるまいか。これまで身につけてきていた中世的外套を脱ぎ捨てて、外衣のみならず下着まで古代一色にしようとしたことである。というのも、自分たちの用いている文法を有効たらしめる基準は何かと彼らは考えたのであって、それを古典古代の著述家の文章に求めたからである。古代の著述家の文章と一致していれば規則は有効とされたわけである。

ギリシア・ローマの文学に対する関心の復興によって、人文主義者たちはスコラ色に染まった文法と中世ラテン語を返け、古代ローマの文法家の文法を受け容れるようになり、古代の用法が最終的な審判を下す役目を負うこととなった。これは中世でも否定されていたわけではなかったが、中世の文法家は理念として掲げていただけで、もっぱら同時代の知識人のラテン語を研究対象とした。

古写本の発掘蒐集や手写本の流布、活版印刷の普及によって、私たちが現在知っているラテン古典の大半は世に出たわけだが、これらは中世期の文法書には記されていないなかった文法を含んでいた。このため人文主義者ははじめ、古代ローマの文法文献の全体に接触することになった。前述のウァロ、それにプロプス、ディオメデスなどはラテン語の知識源であるのみならず、それまで知られていなかった文法理論面での代表格として尊重された。

この結果次の二つの事実が明らかとなった。

(1) 古代の文法の大家の間に、重要な問題で意見の食い違いがあったこと。

(2) これまでの文法教育の礎となっていた古代末期—中世初期の尊敬すべき文法家、ドナトゥスとプリスキアヌスの文法に明らかに誤りがあったこと。

以上の二点は、新たな正しいラテン語文法の確立へと人文主義者たちを駆り立てた。要するに、中世という時代の孕む諸問題が自覚化され、古典を理解したり古典ラテン語を用いたりするうえで、かえって中世の限界が明白となったわけである。これはルネサンス文化の持つ古典古代への回帰と発見のひとつの重要な所産である。文法の古代模倣の教育への顕れとしては次の二点が考えられよう。

(1) 正しいラテン語を書く指導（名詞の格・動詞の変化・名詞の数・人称など）。

(2) 古代人の書いたものと寸分違わぬラテン語を書くこと。

二つのうち、とりわけ(2)がきわめて野心的課題なのは明らかである。この域に到達するために学生たちは言葉の違い、語順、文体、用語選択など、従来の文法の枠を越えて勉強しなければならなかった。「ルネサンス期の文法は、深みにおいて失ったかもしれぬものを広がりにおいて獲得した」とはある学者の言葉だが、至言と言えよう。

ヴァッラに至るまで

ここでヴァッラの『ラテン語の優雅さについて』に至るまでのルネサンス期の「文法」を年代順に追いながら、<sup>1)</sup>「文法」の文化的位置を問う一助としたいと思う。

まず第一に北イタリア、パドヴァ学派のロヴァート・ラヴァーティと弟子のアルベルティ・ムッサートの二人。これら草創期の人文主義者は現行の文法に満足していたようだが、ロヴァートは広い意味でルネサンス期の最初の文法書と言える、セネカの韻律についての小論を書いた。

次にペトラルカであるが、彼は『老年書簡』の中で、文法・修辞学と医学とを比較して、前者の方に好意を寄せている。彼はプリスキアヌスを範としていた。

三番目にペトラルカの弟子のサルターティ。彼は中世のラテン語法（文体）に批判的で新たな言語基準を主張した。

(1) 異邦の言葉の回避。

(2) 文法違反・破格の回避。

(3) 不当な造語の回避。

(4) 容認不可能な意味を有する言葉の回避。

(5) 容認不可能な連語の回避。

以上の五点に批判は集中した。

四番目は教育者グアリーノ・ダ・ヴェローナである。彼には『文法の規則』なる書があるが、獨創性は稀薄で、十四世紀後半に書かれた他書の翻訳のきらいもある。にもかかわらず決定的に際立っていたのは、スコラの文法の特徴である、論理的かつ形而上学的文法把握が姿を消している点である。逆説的だがグアリーノの文法書は、それが含んでいるものではなくて、それが排除したものの点で人文主義的と言える。他に彼には正書法・二重母音・語彙論を扱った著作があり、語学教育に大きな成果を挙げた。

五番目がヴァッラの『ラテン語の優雅さについて』である。この本の狙いとするところは、前述したように純粹で典雅なラテン語の奪還と再生である。特色としては繰り返すまでもなく、狭義の文法書には納まりきらない著作であることが第一である。なぜなら個々の単語の正しい選択や使用法にも関わって、典型的な文法書の結構ではないからである。ゆえに特定の単語や語群の意味論的・統語論的探究が展開されている。第二に、内容が該博でしかも排他的ではない点。古代の著述家から直接引用して文法規則を補足説明しており、そのうえ古代の大家の語句や言い廻しをすべて模倣せよとは述べず、きちんと区別して用いよと主張した。第三に、目配りのきいた批判精神が横溢して、古代の文法家への批判は辛辣を極めていいる。「コンスタンティヌスの寄進状」の真偽の看破にこうした批判精神があざかっていたのは前述したとおりである。

#### 古代回帰とハ文法Vの位置

最後にまとめとして『ラテン語の優雅さについて』の序文を介し、ルネサンス期の文法（ラテン語）再興の息遣いとハ文法Vの文化的位置とを考えてみたい。少々長い引用になるが味読してほしい。

北ヨーロッパやアフリカの少なからぬ地域を含む、ほとんどすべての西方の地に住んでいた我らが祖先は、古代ローマの言葉の名を高めて女王の御位にまで掲げ、また播種のための最良の実として住民にこの言葉を教示しました。さらに彼らは帝国の版図よりも頗る美しく命名高き作品を創造しました。実際、皇帝領を拡大した人々には絶大なる栄誉が与えられるべきであり、彼らは皇帝と呼ばれております。しかし人びとに恩恵を施す人々は、人間でなく神からの讃辞で称えられるものです。そうした方がたは、自分の都市の偉大さや栄光に思いを馳せるのには言うまでもなく、さらにあらゆる人間の存在意義と救済にも心を砕くのは事実です。それゆえにもしわが古代ローマの人びとが戦や幾多の事業において他より秀でているとするならば、古代ローマの言語の普及率は空前絶後であり、帝国の版図を超えて神の国にまで至ったわけなのです。おそらくケレスは作物の、パッコス<sup>1</sup>は酒の、ミネルウア<sup>2</sup>は油の創案者であり、他の神々はそれぞれの恩恵ゆえに、神々の列に伍していたのでした。肉体の栄養でなく精神の營養であり、かつ最上の成果であり神そのものとも思いきラテン語を人びとに配剤したことが、どうして過少なる価値を生むでしょうか。人びとを育み、万民に自由学芸を授けたのは、ひとえにラテン語だったのです。ラテン語こそが人びとに最善の法を教示し、全知への道を整え、ついに彼ら<sup>3</sup>がもはや野蛮人と呼ばれぬよう保証したのでした。したがって公正な判断を下す人なら、恐ろしい戦争を遂行することによって名をあげた人々より、文芸崇拜に身を捧げることによって名をあげた人々の方をよしとするからです。こうした方がたは帝国直屬の臣というよりも、正しくは神の国の臣民なのです。なぜなら彼らは人間を育てるにも似て、ローマ人の國家と威厳を高めたのみならず、神々を想像することなく世界救済の地下をも整えたのですから……。

要するにラテン語の恩恵は偉大なのです。もちろん、異邦人、蛮人、敵対者の許で、敬虔で宗教的に幾世紀にも互って神々に守護されてきた神聖な力も偉大です。かくてわれわれローマ人は不満を託つのではなくて、世界を前にして陽気に自らを誇るべきなのです。われわれは古代ローマをなくし、版図を失い、支配権をも喪失したが、それはわれわれの咎ではなく時代のせいなのです。それに対しわれわれは、ラテン語というこの最も輝かしい威信を胸に再度世界の地域をくまなく支配しているのです。イタリアも、ガリアも、ヒスパニアも、

ゲルマニアも、パンノニア（ドナウ川の南西部）も、ダルマティア（ユーゴスラヴィアの西部海岸地方）も、イリュリウム（マケドニアとイタリアの境界地帯）も、そして他の国も残らずわが版図なのです。ローマの威信のあるところ、ローマの言葉が支配するのです……。

ところで、学識豊かな人物のいなかった過去の時代は悲劇であったが、その悲しみに負けじとわれわれは当代を祝福せねばなりません。というのも、少しく努力すれば、あらゆる学問の糧であるローマの言語の刷新が都市のそれよりも素早いと確信できるからです。それだからこそ、祖国、人類、偉大なる自然へのわたしの愛にかけて、わたしは高みから、言語を研究する者たちに、常のごとく凱歌を挙げるよう勧告したいと思うのです。つまりこういうことなのです。古代ローマの市民たちよ、帝国という家ではなく文芸の母たるあなた方の都市がガリアに侵略されるのを、いつまで許しておくのか。いつまでラテン語が蛮人に圧せられるのを許しておくのか。無関心のまま不敬な眠差しで、いつまで冒瀆されるのを眺めているつもりか。ローマの町の礎の道の残骸がなくなるまでか。あなた方の中には歴史家がいち、それはウェイイ（現在名ヴェイオ。ローマの北十二マイル。エトルリアの町。カミルスに攻略された）に住まうことを意味しています。またギリシア語からの翻訳を生業をしている人もいて、これはアルデア（ローマの南方二十四マイルにあるローマ人の町）に住むことです。また演説の原稿を書く人もいれば一篇の詩をもつ人もいるであろうが、これはカンピドリオの血と城塞とを守ることなのです。大いなる称讃に値する企てであって、敵を駆逐するよりも祖国を解放しているのです。われわれはカミルスの轍を踏まねばなりません。なぜならウェルギリウスも言うように、カミルスが祖国に勝利の旗印と刷新とをもたらしたからなのです。

（傍点——訳者澤井）

引用文すべてに傍点を打ちたい気持ちのするほど熱のこもった訴えであることが読み取れるとともに、狭義の文法書には納まりきれない書物であることも明らかになったと思う。

ヴァッラは古代ローマ帝国の威信の復興に仮託した純正なるラテン語（古代ローマ人の話し書いたラテン語）の再興を基調音として響かせながら、人文主義的刷新の普遍的価値を表現したのではあるまいか。つまり古典古代の文化を蘇生させることである。多くの遺産がラテン語やラテン的知とともに再生され、帝国の崩壊などといったさまざまな政治的変遷を経て、いまはじめて精神の真の刷新が神の国において開始されるのである。刷新という立て役者の中に息づいたこうした意識の意義は大きいと思われる。

ヴァッラは（外国語である）ラテン語つまり（ラテン）文法をそっくりそのまま蘇生させるうえで、その分なおさら古代を批判的に見つめようとしたと考えられる。それは古代、つまり文法が批判性を付与できる存在であり、かつまたそうした自覚の上に立って集められた神話であったとも推察される。純正なる文法（ラテン語）はヴァッラにとって、絶対的な完全性の中にあり、過去にあってひとつの円環を形成していた。

始源へ回帰することは物の本質に触れることであり、価値を認定することでもある。そしてそこに誤謬を見出した場合には批判を通して自覚的な再発見を行わなければならないが、それが可能なのは始源への回帰が模倣に終わらず進歩と歩調を合わせているときに限られよう。ヴァッラは批判を内包した一種の産婆術で新しいダイナミックな方向性を見出していったと考えられる。そのエネルギーの根底に言語（ラテン語つまり文法）への深い認識が潜んでいたのではあるまいか。

正しい文法の体得はヴァッラにとって、古代復興の起爆剤となっており、それを通して始源への回帰は可能となった。諸学問の根源としての文法はルネサンス期に至ってその位置を古典古代の復興の中に見出し、もろもろの豊かな学知を生み出す種子となったのである。